

◆緑爽会 4月 南アルプス芦安山岳館見学と昼食会

桃と桜の花を車窓に見ながら芦安へ。山岳館では北岳パトレス初登攀を巡る新事実を塩沢久仙館長からお聞きます。

日時 平成25年4月11日(木) 雨天決行

集合 甲府駅改札口午前10時

行程 甲府駅10時10分発—芦安山岳館見学—白雲荘昼食—芦安発15時30分—甲府駅解散16時30分ころ

費用 懇親会3000円と甲府・芦安往復バス代2000円(事務局から若干の補助を考慮中) 直前のキャンセルは一部負担を。

申込 3月27日(水) 28日(木) 夜8時~9時に里見清子

☎055-252-0761迄。葉書の場合は3月28日

必着で。400-0016 甲府市武田2-5-5 係・里見/渡部

5月16日(木) 午後1時~ 日本山岳会
会議室で開催します。
詳しくは次号でお知らせします。事務局

厳しかった今年の寒さも3月に入つてようやく春の気配が濃くなりました。うらうらとした日差しの中、3月山行も無事に終了しました。新しいリーダーや初参加の会員など、緑爽会にも新鮮な芽ぶきが感じられます。天候と人の出会いにも恵まれた当日の報告をスケッチや写真と共にお楽しみください。

「緑爽会総会のお知らせ」

今年の総会の日程が決まりました。



緑爽会報 NO.116

13年 3月20日

発行

公益社団法人

日本山岳会 緑爽会

☎03-3261-4433

事務局 松本恒廣

夏原寿一 近藤雅幸

近藤 緑 川口章子

横山 隆 渡部温子

「3月山行報告」

上野原の里山・五感の森を歩く

近藤 雅幸

3月6日。寒さが厳しかった冬も終わり、数日ほど前から急に暖かくなってきた。特に今年は、いつものように徐々に春がやってきたというような季節の移り替わりではなく、春が洪水のように押し寄せてきたといったほうがよいかもしれない。集合場所の上野原駅に行く途中の車窓から眺める山々もくっきりとした冬の色ではなく、どこことなくぼんやりとかすんだ淡い色彩に染まっている。

集合は10時35分と、少し遅いくらいの時間だ。余裕があるためか、ほとんどどのメンバーが一本早い電車で待ち合わせのバス停前にやってきた。全員が集まったところでさっそく



八重山々頂からの雨降山

中村好至恵

新井行きのバスに乗り込む。バスは緑爽会の貸切かとおもいきや、あとから4人ほど乗り込んでくるパーティーがある。山岳会の重鎮、横山厚夫さん、康子さんご夫妻と山田哲郎さん。「静かなる山」の面々だ。奇遇と言えは奇遇、偶然と言えは偶然。聞くと横山さんたちも我々とほとんど同じコースを歩くという。そんなこんなでバスは上野原の街中を抜け一路北に向かう。

新井で北に向かう横山厚夫さんたちを見送り、われわれは豆腐屋の横の路地に入つて虎丸山への近道を行く。杉や檜の植林の中の道は山腹を絡みながら少しづつ高みに向かう。やがて飛び出したところが虎丸山山頂。木立の中に神社がある神域である。一旦下つて明るい広葉樹林の尾根を辿る。空から降り注ぐ暖かい陽光が気持ちを楽しませてくれる。そのせいかみんなはいつもに増して陽気で、楽しそうな話し声が「静かなる山」にこだまする。

30分ほどで最高峰、能岳の山頂に着く。先客が2名、昼食の最中である。われわれも昼食をとる予定だったが、ベンチがあるところで食べたほうがいい。」と渡部さんからの一言。先客も静けさを破られ、迷惑な様子である。記念写真を撮つてそそくさとベンチと東屋が待つ八重山に向かった。明るい尾根をたどること10分。八重山の頂上では先客の横山厚夫さんたちが昼食の最中である。ただ、他にも我々の一行が全員腰を下ろせるだけのベンチがある。横山さんたちに挨拶をすると、「どうぞここで食べていったら」との言葉。それに甘えて遅い昼食とする。

見渡すとウナギの背の様にうねうねと延びる生藤山から三頭山への稜線。権現山は



能岳山頂にて

撮影 小泉義彦

にはトイレがあった。それだったら駐車場なり、大越路方面なり、他の表示があるはずだ。それをわざわざ「トイレ」とかくところが可笑しい。

道路を渡るとその先は秋葉山である。取りつきは墓地の横にあるが、迷路のような墓の間で迷ってしまった。仏様に謝りながら墓の中を無理やり通らせてもらう。

登りきったところは秋葉神社のある頂上だ。展望はよいのだが、町に近すぎてどうも風情に欠ける。

あとは林道のような道を辿ること30分。最後の山頂、根本山は檜林の中にある。以前、里見さんと渡部さんがここに来たとき、三角点を探したがどうしても見つからなかったという。ちょうど通りかかった地元のおじさんがスズメバチの注意を喚起するために話しかけてきたので、三角点のことを尋ねると、笹の中にうずもれている三角点標石を教えてくれた。里見さんは「最大の収穫」と大喜びである。

そこから上野原の商店街は目と鼻の先である。名物「酒まんじゅう」の店に寄ってみるがどこも店じまい。出かける前に開いていた小泉さんの提案、「新井に行く途中で酒まんじゅうを買っていいこう」は、全くもって正しかったのだ。

日が傾き、辺りの風景が赤みを帯びる中、町のはずれに出て、スロープを下ると上野原の駅があった。

陽気に恵まれ、絵にかいたような陽だまりハイキング。奇遇、団らん、好展望、発見、と楽しみにあふれた一日であった。

【参加者名】 松本恒廣・里見清子・渡部温子・大島洋子・富澤克禮・夏原寿一・川口章子・中尾千予光・小泉義彦・中村好至恵

保・近藤雅幸

計11名

【講演原稿】

知られざる美術界の裏話

奥野 溪石



講演する奥野さん 撮影 小泉義彦

◆テレビの「なんでも鑑定団」

テレビの影響か、最近美術館で「この絵はいくら位の価値ですか？」と学芸員を困らせる質問が多いと聞く。因みに美術年鑑には、古くは平安時代からの古筆、墨跡、絵画の評価と経歴等が掲載されているので、おおよその評価額を知ることが出来ます。

例えば秀吉の墨跡2千万円、織田信長1千8百万円、上杉謙信1千3百万円、武田信玄1千万円、宮本武蔵は、書画に優れ4千万円等々……。

◆絵画の鑑定は誰がするのか？

有名画家には、それぞれ特定の鑑定人がおります。東京美術倶楽部の鑑定委員会が、いちばん手広く査定を行っています。持ち込まれる作品の大半は贋作とも言われています。

因みに横山大観の絵になりますと、本物なら1億円は下らないでしょうが、9割が贋作とも言われております。

◆贋作について

古くは吉田兼好の徒然草に、「ある友が、小野の道風の筆になる和歌朗詠集だと持ってきたが、道風死後何十年も経つての和歌集なので、年代的におかしいと申した処、だから珍しいのだと得意になって帰っていった」との記述があります。

かつて大手新聞社主催で開催された「アンリ・ルソー展」は、高名な評論家達が絶賛したにも拘わらず、大半が贋作らしいという噂がありました。京都の博物館主催の「大レブ兰特展」も、偽物が多いということで大論争がありました。

何百年も昔の時代には、絵画も工房で弟子たちと制作したこともあり、それが判定を困難にする一因にもなったようです。今でも独りの画家が、生涯に何百枚も制作しますと、若い頃の自作かどうかわからなくなるケースもあり得るわけです。

ピカソは早描きでも有名で、一日に20枚も描くことがあったようで、多くのコレクターが判定を求めてやってきました。一番高い値の作品が俺が描いた絵だ」と答えたという笑い話があります。今でも各国で彼の贋作ニュースは絶えません（新聞ニュース参照）。

一時、伊太利で超有名な画家たちの贋作が大量に出回って市場を震撼させましたが、犯人は日本人画家だったというショッキングな事件もありました。

レオナルド・ダヴィンチの「モナリザの微笑」ほど、数多く贋作が出現するもの類を見ません。最近もルーブル美術館のモナリザより10代若いころの同じモデルの作品が発見された、新聞で大きく報道されておりました。

以前、上野の美術館で、海外の有名画家による「モナリザの微笑」展と銘打った美術展があ

り、長蛇の列の人気でした。会場に飾られた数多いモナリザ美人が観衆に微笑みかけると、面白い企画でした。

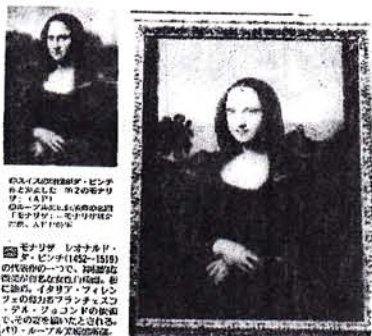
◆盗作と模写について

人の絵を真似て描く盗作も後を絶たず、何年か前に某画家が、美術選奨文科大臣賞を受賞しましたが、これはイタリア人画家の盗作とわかり、賞を剥奪された事件がありました。

模写というのは、勉強や研究のための写生であって、贋作や盗作とは全く性格が違ふものです。欧米の美術館では、有名作家の絵を模写している若い画学生をよく見かけます。

◆投機対象の絵画について

戦後のバブル期には、株や土地と同じく絵画が投機の対象となり、いろいろと話題を提供しました。ゴッホの「ひまわり」を、安田火災が53億円で落札、ルノワール「ムーラン・ド・ラ・ギャレット」108億円を大昭和製紙の名誉会長が落札するなど、新聞紙上を賑わしました。当時は会社の役員室に、高価な絵画を飾ることが流行したり、絵の素人が「何でもいかに値上がりする絵を」という利殖の対象にされたことも多々ありました。



右・スイス財団が発表した第2のモナリザ

左・ルーブル美術館蔵のモナリザ

◆オークションについて

一般に高価な作品は、オークションにかけられることが多く、フランスのザザビーズとクリステーズの姉妹会社が、最大規模を誇っています。ユーロ前の年商が、2社で300億フラン、現在は4兆円を超す取扱いとされます。

◆欧州に於ける知名度の高い日本人画家は？

洋画では、若くして病没した佐伯権三か、藤田嗣治くらいではないかという説さへあります。日本画壇で大師とされる画家も、殆ど知られていないことになります。藤田は戦時中に従軍画家のトップにいたため、敗戦と共に吊るし上げになり、嫌気がさしてフランスに舞い戻り、ピカソなどと交流し、晩年は地元教会を寄付し、自分もそこに葬られました。

◆後世に名を残す画家は誰か？

ある美術家たちの集いで、300年後まで名を残す画家は誰だろうかということが話題となり、ピカソがカラヴァッジョではないかということになりました。

カラヴァッジョは、1571年のミラノ生れ。若くして人気作家となったものの、乱脈な私生活



右・カラヴァッジョ

「果物かごを持つ少年」
下・10万リラ札になった
カラヴァッジョの肖像



10万リラ札(約6000円)になったカラヴァッジョ
人物画家とはいえず殺人犯のカラヴァッジョを
紙幣にしたのは、金銭トラブルには要注意、
というイタリア造幣局の老練心だろう。

活がたり、殺人まで犯して逃亡生活を余儀なくされます。39歳で病死。その力強い名作の数々は、今も人気を衰えません。ユーロ前の10万リラ札の肖像画にもなっています。

◆難関の芸大受験寸描について

上野の美校以来130年の歴史を誇る芸大は、300人の入学者に対し6000人の受験者、4浪5浪はザラで、受験十数回、40歳で合格という豪の者もいる由。いくら特技があっても平均点がよくないと失格になります。貧乏画家がなれの果てと言われた戦前は、上野の美校に行くなら勘当だと親に言われたものでした。その時代に比べ、まさに隔世の感があります。

◆美術団体と画家の最終の夢は？

洋画と日本画で、合わせて約1000の有名な美術団体があり、毎年上野都美術館と六本木の国立美術館で公募展を開催しています。会員数はおそらく1万人を超えるのではないでしょう。会員になるには何回も入選の実績がなくては無理で、そのトップに理事長あるいは会長が鎮座？しておられます。プロの画家の最終の夢は、この神座？におさまることとも言えます。

さらに望みを高くして、その上を狙うなら日本芸術院があります。定員120名で欠員ある時のみ、現会員の推挙でなれる仕組みです。某先輩の話では、推薦を受けるためには秘かに億近い金が動くときもあるとか。高名な某彫刻家が何度も選に洩れ、弟子が会員に推挙されたのを無念に思い、自殺したという実話があるほどで、まさに命がけの名誉欲とも言えます。美術の世界も俗世間とあまり変わらぬ一面があるようです。

◆コレクター松方幸次郎氏の偉業について

JAC会長を務められた松方三郎氏のご尊父の幸次郎氏(旧川崎造船社長)は、コレクターとしても有名で、戦前バリで名作の数々を片っ端から買い付け、画商たちを震え上がらせたという有名な話があります。

帰国に際し、日本の税関が多額の輸入税を課そうとし、談判してもOKしないのでパリに残留、大戦が始まって没収の憂き目に遭う。戦後にやっと返還されて、これを主体に現在の上野の国立西洋美術館の誕生をみたわけで、松方氏が生みの親とも言えます。作品の中でも、一連のロダン作品は世界的にトップクラスとの評価を受けています。

◆版画の世界について

木版画は戦前では、描く、彫る、刷る、の分業でしたが、戦後は一人で行う創作版画が主流となりました。

江戸時代の浮世絵肉筆と木版画は、世界でも非常に高く評価され、モネやゴッホが作品の中にまで取り入れる心酔ぶりでした。戦後、棟方志功がヴェネチアのビエンナーレ国際版画大賞をとって、一躍有名になりました。彼はゴッホに心酔し、若いころゴッホ、ゴッホと常に呟いていたので、周囲の者が肺病になったのかと心配したという逸話があります。

版画の話になりますと、キリがありませんので省略しますが、拙作の木版画「ブナ林と白神山」が、青森の白神山登山口のゲストハウスに展示されておりますので、機会があったら高覧願います。

◆山岳画について

山をテーマにした画家は数え切れぬ程おりますが、足立源一郎が第一人者ではないでしょうか

足立源一郎「松ヶ岳」1965年作



か。彼は作画の主題の大半を山に求め、登山家としても知られ、ヨーロッパアルプスも体験しています。ルームに飾られている「槍ヶ岳(北鎌尾根にて)」は傑作の一つで、急峻な北鎌尾根の岩場に身体をロープで巻きつけて、主峰を描いたと言われる力作で、迫力ある作品です。

近頃はカメラの性能が向上したので、写した山景をもとにアトリエで描く画家が多くなって嘆かわしく思います。

今ひとり異色の画家として、坂本直行さんがおられます。有名な坂本竜馬の妹が北海道に渡り、その姪か甥の孫に当たると言われます。北大を卒業後、道庁勤めをすぐ辞めて、帯広に住み着いて画家に变身。帯広付近のホテル、旅館には必ず直行さんの絵が飾られている由。生活の必要上、相当強引に売りつけたという説もあります。帯広の和菓子老舗の包装紙には、直行さんの絵が印刷されており、そのためいつも行列ができるという話まであります。

お茶ノ水の茗溪堂で直行さんの画集を発刊した関係で、上野の松坂屋で遺作展をやるについて、原宿の旧拙宅に茗溪堂の坂本さんと直行さんの息子さんとが助言を求めに見えられたことを懐かしく思い出します。

もう一人、山岳画家としてセガティニを

セガントーニ



挙げたいと思います。スイスアルプスに魅せられた彼は、山の中腹に住所兼アトリエを建て、終生アルプスの山々を描いた画家として有名です。現在はセガントーニ美術館として、彼の作品とアルプスの眺望を楽しむことができます。

◆ボストン美術館日本館について

明治初期に東大のお雇い教師として来日したフェノロサ（ハーバード大卒）は、一般教師の300倍の高給をとり、美術品の数々を買いあさり、ボストン美術館に保存し、今の日本館の基礎となったわけです。

◆ポール・セザンヌの絵の視点について

いろいろの角度から眺めて描いた対象物を、ひとつの画面に集めて描きこむ画法を、セザンヌは卓上の果物籠やプロバンスの山野風景にとりいれています。現実的にはあり得ませんが、面白い画法ではあります。

◆レオナルド・ダヴィンチの多才ぶり

彼の「人体解剖図」は、現医学からみても極めて正確と言われています。彼は死刑人遺体置き場で秘かに解剖を行って作成したという説があります。多才多能で、私が在仏中、古城巡り

をした際に、ある古城の中のダヴィンチ記念館（城主が彼の晩年の面倒をみた由）で、様々の発明品―速射砲・風力回転機・模型飛行鳥等々を見学しましたが、生前の彼は好奇心の権化のように思えました。

◆富嶽三十六景の富士山について

葛飾北斎の三十六景の絵図は、極めて有名ですが、本当に全部富士山が見えたのか、どうか。最近、NHKで実地検証を試みた写真家の映像が放映されました。確かに大小様々の富士山が望見できましたが、尾州不二見原の図柄で、大桶の中から覗かれる富士山の遠景だけは、どうしても見ることが出来ないことが判明し、漸く一匹釣り揚げた気持ちになった（これはジョー



講演会々場風景

撮影 小泉義彦



早春の山、芽吹きを影る

「森のクラス会」所収の奥野さんの画文

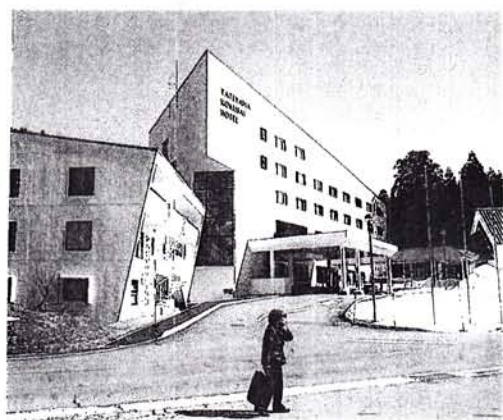
ク。山と山の間になんだけ富士に似た小山が見えることが、地元の人のお話でわかり、北斎はこの山を勘違いしたのだらうという結論でした。北斎は90歳で没するまで絵筆を握り、寄寓先に大作を寄贈したことでも有名です。
（注・浮世絵評論ではトップに位置します。美術年鑑による評価1億円）

◆一筆一紙三に腕の世界

これは有名な某画家が、生徒に言った言葉です。筆も極寒の獣毛を最上とし、一本何十万円もします。日本画・版画では和紙を特別に漉かれます。これに加えて日本画では岩絵具（原料は岩石）という極めて高価な絵具を用います。

また、大作を仕上げる画家ともなれば、驚くような広いアトリエを必要とします。絵の世界も、そうした条件に恵まれた、評価の高い画家たちが、どうしても有利になるのは仕方がないようです。

時間になりましたので、これで終わります。ご清聴に感謝します。（2013年2月15日）



全国集会の会場となる立山国際ホテル

自然保護全国集会、今年は富山支部と共催
7月6〜7日、本格的な登山シーズンに入る前の立山で「立山・弥陀ヶ原の自然に学ぶ」をテーマに開催します。このところ「日本初の水河認定」や「弥陀ヶ原と大日平のラムサール条約登録」が話題になっています。集会では関連した講演を聞いた後、現地を視察します。
近藤雅幸実行委員長はじめ、実行委員会には緑爽会員も大勢関わっています。今年も恒例の支援事業として応援したいと思います。
3月15日、近藤（雅）、富澤克禮、川口章子さんが富山に行き、支部の窓口、金尾誠一さんらの案内で会場の下見と挨拶回りをしました。これから「山」や「木の目草の芽」にも予告が掲載されます。ふるってご参加ください。

【編集後記】★松尾美貴子さんの計報に接して驚いた。緑爽会では若手の一人だったのに、ご冥福を祈ると共に、次号に最長老の国見利夫さんからの追悼文を掲載する。★4月6〜7日、立山で「松尾峠遭難90年祭」がある。板倉・榎・三田家の遺族が集う由。問合せは芳賀孝郎・五十嶋一晃会員へ。★4月13〜14日、四国支部の第1回鳥水祭。支部長の尾野益大会員が大奮闘中。（近藤緑）